ドイツ語

一　前　史

日独文化交流の始まり

日独文化交流の始まりは、一般的に、一五九六（慶長元）年、吉利支丹禁令下での、ドイツの神秘家・修練士トマス・ア・ケンピスの宗教書『コンテムツス・ムンヂ』（天草版）の刊行であるとされる。徳川幕府による、一六三五（寛永十二）年から一八五四（安政元）年までの鎖国時代、オランダ東インド会社の社員あるいは船員として来日したドイツ人はかなりの数にのぼる。その中で特に大きな足跡を残したのがケンペルとシーボルトであろう。

ケンペル（エンゲルベルト・ケンペフェル）は、一六九〇（元禄三）年、オランダ商館付医師として来日。以後二年一〇か月日本に滞在し、『日本誌』を出版した。シーボルト（フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト）は、一八二三（文政六）年、オランダ商館の医師として来日。一八二九（文政十二）年に国外退去になったが、その間、最新の医学知識、科学知識などを日本人に伝えたとされる。なお、一七七四（安永三）年に前野良沢、杉田玄白によって刊行された『解体新書』の原書は、ドイツ人のJ・A・クルムス著『ターヘル・アナトミア』のオランダ語訳である。ただし、蘭学とか英学などの言葉に対して、ドイツ学という言葉は一般に広まることもなく、長い間いわば日

陰の身であった。

「独語学」の始まり

フランス語、露語は一八〇八（文化五）年に、英語は一八〇九（文化六）年に幕府よりその学習が命じられていたが、ドイツ語の学習が幕府によって始められるようになったのは、一八六〇（万延元）年十月の、プロシアの特命全権大使フリードリヒ・ツー・オイレンブルグ伯爵の来航と、これに伴う六一年一月（万延元年十二月）の日普修好通商条約の締結にそなえるためであろう。六〇年八月（万延元年七月十七日、プロシア艦隊が江戸湾に到着する二日前）、蘭学者であり、後に蕃書調所教授となった市川兼恭と加藤弘之がドイツ語修得の内命を受ける。さらに、同年九月には、正式に、ドイツ語学習と辞書編纂の命を受けている。市川と加藤は、蘭独・独蘭辞典、蘭独対訳文典などを使ってドイツ語を学習し、二年後の一八六二（文久二）年冬、『官版独逸単語編』（洋書調所編）を完成した。これが日本人の手による最初の独和辞典（単語集）である。

一八六二（文久二）年、かつての幕府天文方、その後の、蛮書和解御用、洋学所（翻訳局）を前身とする蕃書調所に、露学とともに独逸学が設置されるが、その時に、前記の市川、加藤の両名が教授職に、市川の弟子などが教授出役に命じられている（なお、英学は一八五九［安政六］年に、仏学は六一年に設置されている）。六二年六月、蕃書調所は洋書調所と改称されたが、当時、ドイツ人教師はおらず、ドイツ語を独学した日本人教師による原書講読のような教育が行われていた。ドイツ語を学ぶ生徒数は五〇名ほどであったが、四、五年後の明治維新前には一〇〇名ほどになる。六三年八月、洋書調所は開成所と改称された。

本学建学までの「独語学」

開成所は国事多難をもって一時閉校されたが、王政復古とともに英仏独三か国語の教育を目的として復活し、教育体制の整備が進むなか、英仏の外国人教師が一八六八（明治元）年の暮れに着任したのに続き、七一年にはスイス人ヤーコブ・カデルリー（カドリーとも称した。原語ではJacob Kaderly）もわが国最初のお雇い独逸語教師として着任している。開成所は六九（明治二）年に大学南校と改称。七一（明治四）年正月にプロシア政府から派遣されたホルツが着任。これを機に、校内に独語学の学生を対象にした独逸学仮教場を設け、修業年限三か年で、十六歳から十八歳までの者三〇名を募集した。なお、同年四月には、神田錦町三丁目一番地に別校舎を建て、独逸学教場となった。七一年七月、大学南校は単に南校と改称、さらに翌七二年八月には、本校が第一大学区第一番中学に、独逸学教場は（洋学第一校と改称された後）第一大学区第二番中学になった。またさらに、第一大学区第二番中学が七三年三月から第一大学区独逸学教場と称される一方、第一大学区第一番中学は同年四月に、高等教育を施す専門教育機関としての開成学校になる。開成学校では、生徒が（上級生の）専門学生徒と（下級生の）語学生徒とに分けられる。そして同年十一月、開成学校の語学生徒と外務省独魯清語学所、および独逸学教場の三つが合併し、官立の外国語学校「東京外国語学校」が誕生することになる。これをもって本学の「建学」となるわけであるが、建学の成り行きからして当然、英、仏、露、支の言語と並んで、独語科も設置された。なお、東京外国語学校の建学に際し、独逸学教場が合併の対象にならなかったという見解もある。

その他

ドイツ語に対する研究熱は時代の流れとともに高まってくるわけであるが、この背景には、普仏戦争（一八七〇

［明治三］年―七一年）でドイツが圧倒的な勝利をおさめ、ドイツ帝国が建設されたことがある。日本の陸軍も、フランス式からドイツ式に切り替えられ、後に、陸軍の諸学校に東京外国語学校の卒業生が数多くドイツ語の教官として送り込まれるようにもなる。また、ドイツ語を教える私塾が東京にたくさんでき、明治初期には約三〇、明治十年代から大正初期には五〇を超えたとのことである。その代表的なものが一八八三（明治十六）年創立の独逸学協会学校（今の独協大学）である。ドイツとの文化的交流も盛んになり、七一年にドイツの医学者たちが招聘され、七六年にはベルツが来日し、東大医学部で教鞭をとっている。さらには、一八八二（明治十五）年頃、憲法の制定が重要な課題になり、伊藤博文が憲法調査のために渡欧し、最終的には、ドイツに範をとることになったことは有名である。一八六八（明治元）年から七四（明治七）年までに、日本近代化のために招いた外国人教師は延べ五八〇名を数える。また、政府留学生は、明治初年から日露戦争期（一九〇四［明治三十七］年から〇五年）までで六八三人にのぼり、そのうちの八〇パーセントがドイツに派遣されている（小塩節『ドイツと日本』講談社学術文庫、一九九四年）。このように日本とドイツとの関係、あるいは日本におけるドイツ語教育の重要性は増してくるのであるが、本学の、建学後の歴史は必ずしも順調と言えるものではない。